

# 確率統計 A

## 第 3 章 平均と特性量 (Part 3)

(2012 年 6 月 26 日)

- 講師:若木宏文
- E-mail: wakaki@math.sci.hiroshima-u.ac.jp
- Web: <http://home.hiroshima-u.ac.jp/~wakaki/lecture/probstatA12/>

確率統計 A, 2012年6月26日: P.1

### 平均ベクトル&共分散行列

定義 3.6.  $p$  次元確率ベクトル  $\mathbf{X} = (X_1, \dots, X_p)'$  について

$E(X_i) = \mu_i$ ,  $E\{(X_i - \mu_i)(X_j - \mu_j)\} = \sigma_{ij}$  ( $i, j = 1, \dots, n$ ),  
とする。このとき

$$\boldsymbol{\mu} = \begin{pmatrix} \mu_1 \\ \vdots \\ \mu_p \end{pmatrix}, \quad \Sigma = \begin{pmatrix} \sigma_{11} & \cdots & \sigma_{1p} \\ \vdots & \ddots & \vdots \\ \sigma_{p1} & \cdots & \sigma_{pp} \end{pmatrix}$$

をそれぞれ  $X$  の平均ベクトル, 共分散行列と呼ぶ。

確率統計 A, 2012年6月26日: P.2

### Example 2

Example 3.6.

1. 3項分布,  $\mathbf{X} \sim M_3(n, p)$  の場合:

$$E(\mathbf{X}) = n\mathbf{p} = \begin{pmatrix} np_1 \\ np_2 \end{pmatrix}, \quad \text{Cov}(\mathbf{X}) = \begin{pmatrix} np_1(1-p_1) & -np_1p_2 \\ -np_1p_2 & np_2(1-p_2) \end{pmatrix}$$

2. 2次元正規分布,  $\mathbf{X} \sim N_2(\boldsymbol{\mu}, \Sigma)$  の場合:

$$E(\mathbf{X}) = \boldsymbol{\mu} = \begin{pmatrix} \mu_1 \\ \mu_2 \end{pmatrix}, \quad \text{Cov}(\mathbf{X}) = \Sigma = \begin{pmatrix} \sigma_{11} & \sigma_{12} \\ \sigma_{12} & \sigma_{22} \end{pmatrix}$$

確率統計 A, 2012年6月26日: P.3

### 定理3.11

2次元確率ベクトル  $X = (X_1, X_2)'$  の平均ベクトルと共分散行列を

$$\boldsymbol{\mu} = \begin{pmatrix} \mu_1 \\ \mu_2 \end{pmatrix}, \Sigma = \begin{pmatrix} \sigma_{11} & \sigma_{12} \\ \sigma_{21} & \sigma_{22} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \sigma_1^2 & \rho\sigma_1\sigma_2 \\ \rho\sigma_1\sigma_2 & \sigma_2^2 \end{pmatrix}$$

とする。ただし  $\sigma_1 > 0, \sigma_2 > 0$  とする。このとき、

$$\begin{aligned} \min_{\alpha, \beta} E\{(X_2 - \alpha - \beta X_1)^2\} &= E\{(X_2 - \hat{\alpha} - \hat{\beta} X_1)^2\} \\ &= \sigma_2^2(1 - \rho^2) \end{aligned}$$

となる。ここに  $\hat{\alpha} = \mu_2 - \hat{\beta}\mu_1, \hat{\beta} = \rho\sigma_2 / \sigma_1$ 。

確率統計 A, 2012年6月26日: P.4

---

---

---

---

---

---

---

### 定理3.11の証明

確率統計 A, 2012年6月26日: P.5

---

---

---

---

---

---

---

### 注 3.9

確率変数  $X_2$  を  $X_1$  の 1 次結合  $\alpha + \beta X_1$  で近似するときの誤差を  $E\{(X_2 - (\alpha + \beta X_1))^2\}$  で測るとき、これを最小にする最良近似

$$\hat{\alpha} + \hat{\beta}X_2 = \mu_2 + \rho(\sigma_2 / \sigma_1)(X_1 - \mu_1)$$

の誤差は  $\sigma_2^2(1 - \rho^2)$  である。 $|\rho|$  が大きくなると誤差は小さくなる。

確率統計 A, 2012年6月26日: P.6

---

---

---

---

---

---

---

### 3.4. 条件付き分布と平均

確率統計 A, 2012年6月26日: P.7

---

---

---

---

---

---

#### 条件付き分布

$X$ を確率変数とし,  $B \in \mathcal{B}$ は $P(B) > 0$ であるとする.  
 $A \in \mathcal{B}$ に対して, 事象 $B$ を与えたときの事象  
“ $X \in A$ ”の条件付き確率は,

$$P(X \in A | B) = \frac{P("X \in A" \cap B)}{P(B)}$$

$B$ を固定して,  $P_{X|B}(A) = P(X \in A | B)$ を $A$ の関数と  
みると,  $P_{X|B}$ は $(\mathbb{R}, \mathcal{B}_1)$ 上の確率測度になる. これを  
を $B$ を与えたときの $X$ の条件付き分布と呼ぶ.

確率統計 A, 2012年6月26日: P.8

---

---

---

---

---

---

#### 離散型の場合

$(X, Y)$ を2次元の離散型確率変数とし, 同時確率  
関数を $f_{X,Y}(x,y)$ ,  $Y$ の周辺確率関数を $f_Y(y)$ とする.

$$\begin{aligned} f_{X|Y}(x | y) &= P(X = x | Y = y) \\ &= \frac{P(X = x, Y = y)}{P(Y = y)} = \frac{f_{X,Y}(x, y)}{f_Y(y)} \end{aligned}$$

を  $Y=y$ を与えたときの $X$ の条件付き確率関数と  
呼ぶ(条件付き確率関数で決まる確率分布を**条件付き分布**と呼ぶ). 条件付き確率関数は以下  
の性質を満たす.

$$[1]. f_{X|Y}(x_j | y) \geq 0, j = 1, 2, \dots [2]. \sum_{j \geq 1} f_{X|Y}(x_j | y) = 1$$

確率統計 A, 2012年6月26日: P.9

---

---

---

---

---

---

### 連続型の場合

$(X, Y)$ を2次元の連続型確率変数とし、同時確率密度関数を $f_{X,Y}(x,y)$ 、 $Y$ の周辺確率密度関数を $f_Y(y)$ とする。

$$f_{X|Y}(x | y) = \frac{f_{X,Y}(x,y)}{f_Y(y)}$$

を $Y=y$ を与えたときの $X$ の条件付き確率密度関数と呼ぶ(条件付き確率密度関数で決まる確率分布を**条件付き分布**と呼ぶ)。条件付き確率密度関数は以下の性質を満たす。

- [1].  $f_{X|Y}(x | y) \geq 0, \forall x \in \mathbb{R}$ , [2].  $\int_{-\infty}^{\infty} f_{X|Y}(x | y) dx = 1$

確率統計 A, 2012年6月26日: P.10

### 条件付き平均

条件付き分布での平均を**条件付き平均**と呼ぶ。 $Y=y$ を与えたときの $X$ の条件付き平均は

$$E(X | y) = \begin{cases} \sum_{i=1}^{\infty} x_i f_{X|Y}(x_i | y) & (\text{離散型の場合}) \\ \int_{-\infty}^{\infty} x f_{X|Y}(x | y) dx & (\text{連続型の場合}) \end{cases}$$

で定義される。また通常の期待値と同様に、離散型の場合、右辺の級数が絶対収束する、連続型の場合、右辺が絶対積分可能であるとき、条件付き平均は存在するという。

確率統計 A, 2012年6月26日: P.11

### 性質 (1/2)

定理3.12.  $(X, Y)$ の同時確率関数(または確率密度関数)を $f_{X,Y}(x,y)$ とし、 $Y=y$ を与えたときの $X$ の条件付き確率関数(または確率密度関数)を $f_{X|Y}(x|y)$ とする。このとき次が成り立つ。

$$E\{g(X) | y\} = \begin{cases} \sum_{i=1}^{\infty} g(x_i) f_{X|Y}(x_i | y) & (\text{離散型の場合}) \\ \int_{-\infty}^{\infty} g(x) f_{X|Y}(x | y) dx & (\text{連続型の場合}) \end{cases}$$

注) 証明は定理3.1と同様して得られる。

確率統計 A, 2012年6月26日: P.12

## 性質 (2/2)

定理3.13.  $(X, Y)$ は同時確率関数(または確率密度関数) $f_{X,Y}(x,y)$ を持つとする。このとき、

$$E\{E(X | Y)\} = E(X)$$

連続型での証明)

$$\begin{aligned} E\{E(X | Y)\} &= \int_{-\infty}^{\infty} \left\{ \int_{-\infty}^{\infty} xf_{X|Y}(x,y)dx \right\} f_Y(y)dy \\ &= \int_{-\infty}^{\infty} x \left\{ \int_{-\infty}^{\infty} f_{X,Y}(x,y)dy \right\} dx \\ &= \int_{-\infty}^{\infty} xf_X(x)dx = E(X) \end{aligned}$$

確率統計 A, 2012年6月26日: P.13

## Example

$(X, Y)$ が2次元正規分布  $N_2(\mu, \Sigma)$  に従うとする。このとき、

$$\begin{aligned} f_{X,Y}(x,y) &= \frac{1}{2\pi\sigma_1\sigma_2\sqrt{1-\rho^2}} \\ &\times \exp \left[ -\frac{1}{2(1-\rho^2)} \left\{ \left( \frac{x-\mu_1}{\sigma_1} \right)^2 - 2\rho \left( \frac{x-\mu_1}{\sigma_1} \right) \left( \frac{y-\mu_2}{\sigma_2} \right) + \left( \frac{y-\mu_2}{\sigma_2} \right)^2 \right\} \right] \\ &= f_{X|Y}(x | y) \times f_Y(y) \end{aligned}$$

と表される。

確率統計 A, 2012年6月26日: P.14

## Example (続き)

ここで、

$$\begin{aligned} f_{X|Y}(x | y) &= \frac{1}{\sqrt{2\pi(1-\rho^2)\sigma_1^2}} \exp \left[ -\frac{1}{2(1-\rho^2)\sigma_1^2} \left\{ x - \mu_1 - \rho \frac{\sigma_1}{\sigma_2} (y - \mu_2) \right\}^2 \right] \\ f_Y(y) &= \frac{1}{\sqrt{2\pi\sigma_2^2}} \exp \left[ -\frac{1}{2\sigma_2^2} (y - \mu_2)^2 \right] \end{aligned}$$

したがって  $Y=y$  が与えられたときの  $X$  の条件付き分布は

$$N(\mu_1 - \rho\sigma_1(y - \mu_2) / \sigma_2, (1 - \rho^2)\sigma_1^2)$$

$$E\{E(X | Y)\} = E\{\mu_1 - \rho\sigma_1(Y - \mu_2)\} = \mu_1 = E(X)$$

確率統計 A, 2012年6月26日: P.15